

カウンセラーがもつ人間観が 来談意図に及ぼす効果について：順序効果の検討

織田 信男 (岩手大学)

1. 問題

将来カウンセリングを希望する潜在的来談者は、カウンセラーがもつさまざまな人間観に対して如何なる印象をもつのであろうか。Hjelle & Ziegler(1992)は、カウンセラーがもつ人間観を九つの次元、すなわち、Freedom - Determinism、Rationality - Irrationality、Holism - Elementalism、Constitutionalism - Environmentalism、Changeability - Unchangeability、Subjectivity - Objectivity、Proactivity - Reactivity、Homeostasis - Heterostasis、Knowability - Unknowability に分類した。各次元は独立したものであり、Freedom - Determinism 次元は人間の行動は自分の意志で決定されているのかそれとも環境や状況によって決定されているのかを示す次元である。Rationality - Irrationality 次元は人間を合理的な存在とみなすか不合理な存在とみなすかを示す次元である。Holism - Elementalism 次元は人間を統合体として包括的に見るかそれとも細かく分解して見るかを示す次元である。Constitutionalism - Environmentalism 次元は人間の性格は遺伝で決まるか環境で決まるかを示す次元である。Changeability - Unchangeability 次元は人間の性格は変わることができるかそれとも変わることができないかを示す次元である。Subjectivity - Objectivity 次元は人間の行動を理解するにはその人の主観的な経験を知るかまたは客観的な状況を知るかを示す次元である。Proactivity - Reactivity 次元は人間の行動の原因の所在と密接に関係し、自分自身の行動を内的に生じるものとみなすのかそれとも外的刺激への一連の反応としてみなすかを示す次元である。Homeostasis - Heterostasis 次元は人間は緊張を低減し内的な平衡状態を保つために動機づけられるのかそれとも成長や自己実現に向けて動機づけられるのかを示す次元である。Knowability - Unknowability 次元はいつかは人間の本質を科学的にすべて知ることが出来ると見なすのかそれとも知ることができないと見なすかを示す次元である。これら九つの各次元において、カウンセラーは三つのタイプに分けることができる。例えば、Freedom - Determinism 次元では、人間の可能性を主張するロジャースのように左極の Freedom を示す人間観をもつカウンセラーを A タイプのカウンセラーとし、人間の行動は条件づけによって決定されると主張するスキナーのように右極の Determinism を示す人間観をもつカウンセラーを B タイプのカウンセラーとし、互恵的決定主義 (reciprocal determinism) を唱えるバンデューラのように両極の中間の人間観を示す人間観をもつカウンセラーを C タイプのカウンセラーと分類することが可能である (織田, 1993)。他の八つの次元においても左極を示すカウンセラーを A タイプ、右極を示すカウンセラーを B タイプ、両極の中間を示すタイプを C タイプとした。織田 (1993) は潜在的来談者に対してこれらの人間観をもつカウンセラーに対する印象と来談意図を測定したが、その結果、潜在的来談者は人間観を示す九つの次元において、三タイプのカウンセ

セラーの中で両極の中間を示すCタイプのカウンセラーに対する印象や来談意図が高く評定された。特に、来談意図に関しては、九つの次元の中で八つの次元において来談意図が最も高く、しかも、五つの次元で他のタイプのカウンセラーに比べて統計的に有意に高く評定された。しかし、この研究では、方法論的課題が挙げられた。すなわち、この研究では、九つの次元は個体間要因のランダム配列であったが、カウンセラーの三タイプは個体内要因の固定配列であったために、新近効果 (recency effect) といった順序効果を受けた可能性がある。したがって、今回の研究では、カウンセラーの人間観がカウンセラーの印象と来談意図へ及ぼす効果について、カウンセラータイプ要因をランダムに配置して順序効果を検討する。

2. 方法

〔質問紙〕 人間観を示す九つの次元毎に、三タイプのカウンセラーについて記述文を呈示した。尚、この三タイプは、各次元の左極の次元を示したものをAタイプのカウンセラーとし、右側の次元を示したものをBタイプのカウンセラー、両極の中間を示したものをCタイプのカウンセラーとした。質問紙は三タイプのカウンセラーの記述文の順序をランダム配置にした為に六通りの質問紙より成る (I. ABC、II. ACB、III. BAC、IV. BCA、V. CAB、VI. CBA)。尚、質問紙は九つの次元についてもランダム配列にした。従属変数は、来談意図尺度、親しみやすさ尺度、社会的望ましき尺度、力本性尺度、理解度の5つである。各尺度は7件法の両極尺度であり、符号化に関しては、例えば、来談意図尺度では「非常に相談したくない(1)」、「わりと相談したくない(2)」、「すこし相談したくない(3)」、「どちらでもない(4)」、「すこし相談したい(5)」、「わりと相談したい(6)」、「非常に相談したい(7)」とした。

〔被験者〕 岩手大学の学生139名で、呈示順序がIでは23名、IIでは25名、IIIでは22名、IVでは24名で、Vでは23名、VIでは22名であった。

〔手続き〕 授業時間中に学生へ質問紙を配付し記入させた。

3. 結果

本研究では、従属変数として来談意図のみを報告する。Figure 1からFigure 9は各次元におけるカウンセラータイプ毎の呈示順序別の来談意図の平均値を示す。これらの図の中で、先行研究のデータ (織田,1993) を比較のために挿入した。尚、この先行研究の呈示順序はABCという順序であったので、本研究の呈示順序Iに相当する。さて、呈示順序 (個体間要因) とカウンセラーのタイプ (個体内要因) の6×3の分散分析をSTAR (田中・山際,1992) を用いて行った。結果は九つの次元全てにおいて交互作用が1%水準で有意であった ($F(10,266) = 8.65$, $F(10,266) = 5.45$, $F(10,266) = 7.18$, $F(10,266) = 22.27$, $F(10,266) = 19.68$, $F(10,266) = 3.24$, $F(10,266) = 10.62$, $F(10,266) = 4.86$, $F(10,266) = 5.01$)。そこで、各次元毎に単純効果を検討するためにLSD法により5%水準で分析を行った。

Freedom - Determinism 次元では、Figure 1に示すように、呈示順序Iにおいて次元の

右極である Determinism を示すBタイプのカウンセラーよりも次元の左極である Freedom を示すAタイプのカウンセラーが、Aタイプのカウンセラーよりも両極の中間の人間観を示すCタイプのカウンセラーに対して来談意図が有意に高く評定された ($M=4.61$ VS. 3.61 VS. 5.48)。この結果は先行研究(織田,1993)とほぼ同じ傾向であった。呈示順序IIIでは、AタイプのカウンセラーよりもCタイプのカウンセラーの方が有意に来談意図が高かった ($M=4.14$ VS. 5.14)。また、呈示順序VIではBタイプよりもAタイプやCタイプのカウンセラーへの来談意図が有意に高かった ($M=3.73$ VS. 5.14 VS. 5.23)。一方、呈示順序IVではAタイプよりもCタイプが、CタイプよりもBタイプのカウンセラーへの来談意図が有意に高く評定された ($M=3.29$ VS. 4.38 VS. 5.58)。また、呈示順序Vでは、CタイプよりもAタイプのカウンセラーへの来談意図が統計的に有意に高く評定された ($M=3.74$ VS. 5.09)。

Rationality - Irrationality 次元では、Figure 2 に示すように、呈示順序Iでは右極の Irrationality を示すBタイプのカウンセラーよりも両極の中間を示すCタイプのカウンセラーへの来談意図得点が有意により高く評定され ($M=3.39$ VS. 4.65)。呈示順序IIIにおいても、左極の Rationality を示すAタイプよりも両極の中間を示すCタイプのカウンセラーへの来談意図得点がより高く評定された ($M=3.27$ VS. 4.46)。逆に、呈示順序IIとIVではAタイプやCタイプのカウンセラーよりもBタイプのカウンセラーの方が有意に高く評定された ($M=3.44$ VS. 3.84 VS. 4.72 ; $M=3.46$ VS. 3.92 VS. 5.29)。また、呈示順序VIではAタイプのカウンセラーがBタイプやCタイプのカウンセラーに比べて来談意図が有意に高かった ($M=5.09$ VS. 3.90 VS. 4.14)。

Holism - Elementalism 次元では、Figure 3 に示すように、呈示順序Iでは右極の Elementalism を示すBタイプのカウンセラーに比べてCタイプのカウンセラーへの来談意図が有意に高く評定された ($M=4.09$ VS. 4.96)。呈示順序IIIにおいても、左極の Holism を示すAタイプよりもCタイプの方が有意に高く評定された ($M=3.77$ VS. 5.05)。一方、呈示順序IIではBタイプのカウンセラーがCタイプのカウンセラーよりも高く評定された ($M=4.68$ VS. 3.68)。また、呈示順序IVでも、AタイプやCタイプのよりもBタイプのカウンセラーへの来談意図が高かった ($M=4.08$ VS. 4.29 VS. 5.54)。呈示順序Vでは、AタイプのカウンセラーがCタイプのカウンセラーよりも来談意図が高かった ($M=4.61$ VS. 3.48)。

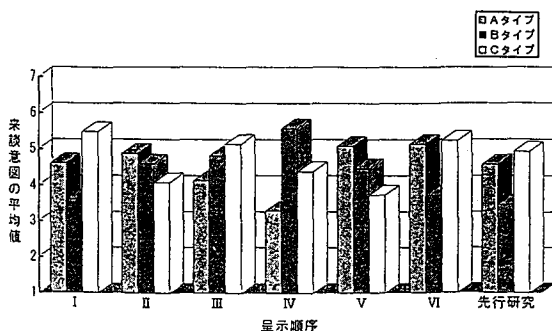


Figure 1. Freedom-Determinism次元での来談意図に及ぼすカウンセラータイプと呈示順序の交互作用効果

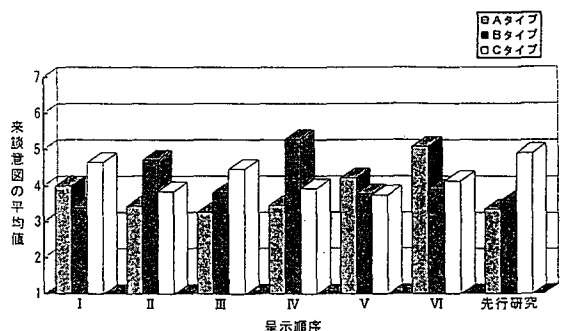


Figure 2. Rationality-Irrationality次元での来談意図に及ぼすカウンセラータイプと呈示順序の交互作用効果

また、呈示順序VIでは、BタイプよりもCタイプが、CタイプよりもAタイプのカウンセラーへの来談意図が高かった ($M=3.59$ VS. 4.50 VS. 5.32)。

Constitutionalism – Environmentalism 次元では、Figure 4 に示すように、呈示順序 I では Constitutionalism を示すAタイプよりも Environmentalism を示すBタイプのカウンセラーが、Bタイプよりも両極の中間を示すCタイプのカウンセラーの方が来談意図評定が有意に高く評定された ($M=3.09$ VS. 4.30 VS. 5.57)。呈示順序がIIでもAタイプよりもBタイプとCタイプが高く評定され ($M=2.36$ VS. 4.92 VS. 4.76)、呈示順序IIIでもBタイプよりもAタイプとCタイプのカウンセラーへの来談意図が高く評定された ($M=3.41$ VS. 5.00 VS. 5.05)。一方、呈示順序IVでは、AタイプとBタイプの方がCタイプのカウンセラーよりも来談評定が高かった ($M=5.25$ VS. 5.17 VS. 2.96)。また、呈示順序Vでも、BタイプよりもCタイプ、CタイプよりもAタイプのカウンセラーへの来談評定が高かった ($M=2.87$ VS. 3.78 VS. 5.04)。呈示順序VIではAタイプやBタイプのカウンセラーへの来談評定がCタイプよりも高かった ($M=5.14$ VS. 4.59 VS. 3.23)。

Changeability – Unchangeability 次元では、Figure 5 に示すように、呈示順序 I では、右極の Unchangeability を示すBタイプのカウンセラーよりも、左極の Changeability を示すAタイプや両極の中間を示すCタイプのカウンセラーへの来談意図が高かった ($M=3.44$ VS. 4.78 VS. 5.22)。呈示順序IIIとIVでは、AタイプのカウンセラーよりもBタイプとCタイプのカウンセラーへの来談意図が高かった ($M=2.41$ VS. 5.14 VS. 5.59 ; $M=2.58$ VS. 4.92 VS. 5.29)。

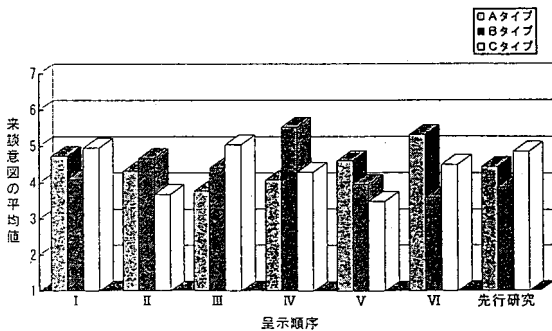


Figure 3. Holism-Elementalism次元での来談意図に及ぼすカウンセラータイプと呈示順序の交互作用効果

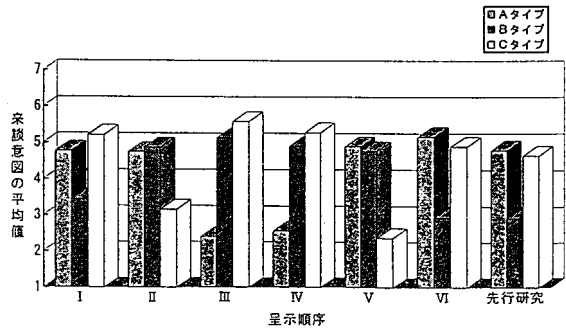


Figure 5. Changeability-Unchangeability次元での来談意図に及ぼすカウンセラータイプと呈示順序の交互作用効果

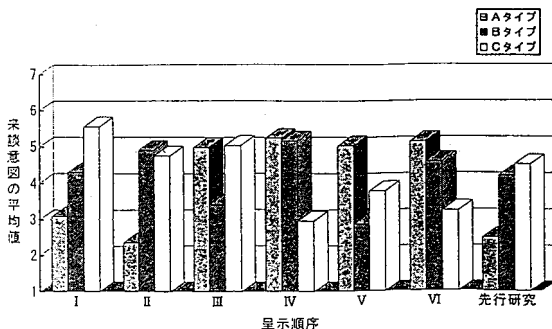


Figure 4. Constitutionalism-Environmentalism次元での来談意図に及ぼすカウンセラータイプと呈示順序の交互作用効果

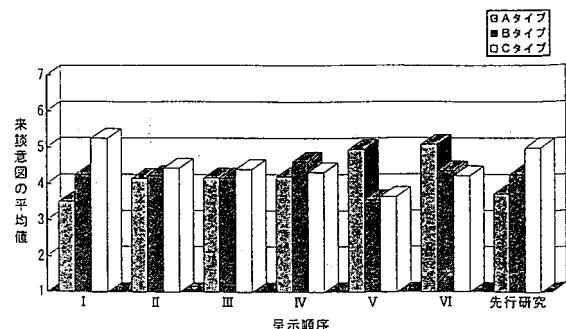


Figure 6. Subjectivity-Objectivity次元での来談意図に及ぼすカウンセラータイプと呈示順序の交互作用効果

呈示順序VIではBタイプに比べてAタイプやCタイプのカウンセラーへの来談意図が高く
 評定された ($M=2.95$ VS. 5.18 VS. 4.91)。一方、呈示順序IIとVではCタイプのカウンセ
 ラーよりもAタイプとBタイプのカウンセラーへの来談意図が有意に高かった ($M=3.16$
 VS. 4.76 VS. 4.88 ; $M=2.39$ VS. 4.91 VS. 4.78)。

Subjectivity – Objectivity 次元では、Figure 6 に示すように、呈示順序 I では左極の
 Subjectivity を示すAタイプのカウンセラーや右極の Objectivity を示すBタイプのカウンセ
 ラーよりも両極の中間を示すCタイプのカウンセラーへの来談意図が有意に高かった
 ($M=3.52$ VS. 4.26 VS. 5.26)。一方、呈示順序VではBタイプやCタイプのカウンセラー
 よりもAタイプのカウンセラーへの来談意図が高かった ($M=3.56$ VS. 3.65 VS. 4.96)。

Proactivity – Reactivity 次元では、Figure 7 に示すように、呈示順序 I では、左極の
 Proactivity を示すAタイプのカウンセラーや右極の Reactivity を示すBタイプのカウンセ
 ラーよりも両極の中間を示すCタイプのカウンセラーへの来談意図が有意に高かった (M
 $=4.09$ VS. 3.57 VS. 5.30)。呈示順序IIIではAタイプよりもBタイプやCタイプのカウンセ
 ラーへの来談意図が高く評定された ($M=3.18$ VS. 4.50 VS. 5.00)。一方、呈示順序IIでは
 CタイプよりもAタイプとBタイプのカウンセラーへの来談意図が高く評定され (M
 $=3.72$ VS. 4.60 VS. 4.80)、また、呈示順序IVでも、AタイプよりもCタイプ、Cタイプよ
 りもBタイプのカウンセラーへの来談意図が高く評定された ($M=3.21$ VS. 4.42 VS. 5.58)。
 呈示順序VとVIでは、CタイプよりもAタイプのカウンセラーへの来談評定が高かった
 ($M=3.52$ VS. 4.65 ; $M=4.18$ VS. 5.32)。なお、呈示順序VIでは、BタイプよりもAタイプ
 のカウンセラーへの来談意図も高かった ($M=3.40$ VS. 5.32)。

Homeostasis – Heterostasis 次元では、Figure 8 に示すように、呈示順序 I では、左極の
 Homeostasis を示すAタイプのカウンセラーや右極の Heterostasis を示すBタイプの coun
 セラーよりも両極の中間を示すCタイプのカウンセラーへの来談意図が有意に高かった
 ($M=4.57$ VS. 4.52 VS. 5.35)。呈示順序IIIではAタイプよりもCタイプのカウンセラーへ
 の来談意図が高く評定された ($M=4.09$ VS. 4.90)。一方、呈示順序Vでは、Cタイプよ
 りもBタイプ、BタイプよりもAタイプのカウンセラーへの来談意図が高かった ($M=3.48$
 VS. 4.21 VS. 4.87)。また、呈示順序VIでは、BタイプよりもAタイプのカウンセラーへ
 の来談意図が高かった ($M=4.27$ VS. 5.32)。

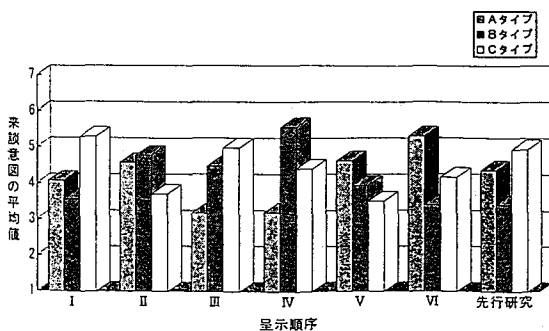


Figure 7. Proactivity-Reactivity次元での来談意図に
 及ぼすカウンセラータイプと呈示順序の交互作用効果

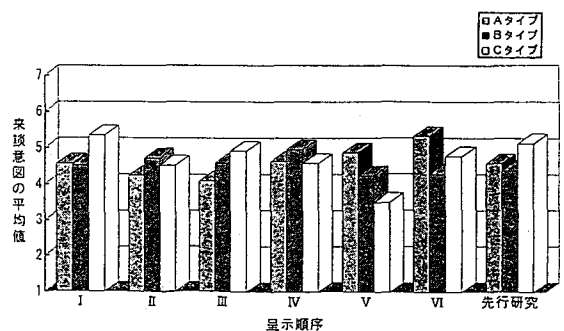


Figure 8. Homeostasis-Heterostasis次元での来談意図に
 及ぼすカウンセラータイプと呈示順序の交互作用効果

Knowability – Unknowability 次元では、Figure 9 に示すように、呈示順序 I では、左極の Knowability を示す A タイプのカウンセラーよりも両極の中間を示す C タイプのカウンセラーへの来談意図が有意に高かった ($M=3.91$ VS. 5.22)。呈示順序 III では右極の Unknowability を示す B タイプのカウンセラーよりも A タイプや C タイプのカウンセラーへの来談意図が高く評価された ($M=3.32$ VS. 4.64 VS. 5.23)。一方、呈示順序 II と IV では A タイプや C タイプよりも B タイプの方が高く評価された ($M=3.56$ VS. 3.56 VS. 4.88 ; $M=3.71$ VS. 3.75 VS. 5.04)。呈示順序 V では B タイプよりも A タイプのカウンセラーへの来談意図が高く ($M=3.34$ VS. 4.57)、呈示順序 VI でも B タイプや C タイプよりも A タイプのカウンセラーへの来談評価が高かった ($M=3.82$ VS. 3.73 VS. 5.00)。

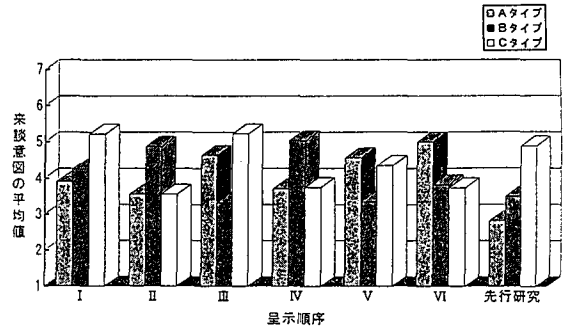


Figure 9. Knowability–Unknowability次元での来談意図に及ぼすカウンセラータイプと呈示順序の交互作用効果

4. 考察

来談意図に及ぼす条件文の呈示順序の違いにより、いろいろな人間観を示したカウンセラータイプの効果が異なった。すなわち、順序効果が来談意図得点において認められた。このことは本研究が二つの要因を共にランダム配列にしなければならないことを示唆する。

ところで、人間観を示す九つの次元全てにおいて、カウンセラーの三タイプの中で両極の中間を示す C タイプのカウンセラーに対する来談意図が、呈示順序が最後である I 条件と III 条件で平均値が最も高かった。いわゆる、新近効果 (recency effect) が認められた。この新近効果は A タイプや B タイプのカウンセラーでも認められたが、C タイプのカウンセラーにおいて最も顕著に認められた。なぜ、C タイプのカウンセラーが最後に呈示される I 条件と III 条件では、新近効果が生じ易いのであろうか。

印象形成の先行研究によると、新近効果は、一人の刺激人物に対する複数の情報呈示における順序効果として研究され、初期の印象とまったく矛盾する情報が与えられた場合には、最後に得た情報が重視される親近効果が認められやすい (廣岡, 1989)。また、対人認知を情報の体制化のプロセスと考えると、一致しない情報を統合するような解釈がなされることが考えられる (吉村, 1987; 吉原, 1991)。さらに、Hastorf (1978) らは、矛盾する情報の解決として、矛盾した情報がその有する意味を変えたり、矛盾を関連づけるために新しい特性が推測されるとした関連づけの傾向 (relational tendency) を指摘する。本研究では、呈示順序が I と III において、C タイプよりも以前に呈示される A タイプと B タイプのカウンセラーの記述が逆の意味を示しているため、これらの情報は矛盾しているものと考えら

れる。矛盾した情報の後に、両極の中間の意味を持つCタイプのカウンセラーの記述が呈示されることは、ある意味で、これらの矛盾を統合したり関連づけたりするための新しい特性が推測される状況に相当していたものと考えられる。言い換えれば、矛盾した情報を統合する処理情報として、Cタイプのカウンセラーの記述が使用されたものと考えられる。今後は、他の従属変数である親しみやすさ尺度、社会的望ましさ尺度、力本性尺度においても新近効果が認められるか否かを検討する必要がある。

引用文献

- ハストーフ A.H. シュネイダー D.J. ポルフカ J. 高橋雅春(訳) 1978 対人知覚の心理学 キースラーC. A.(編) 広田君美(監修) 現代社会心理学の動向 2 誠信書房
- 廣岡秀一 1989 対人認知 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一(編) 社会心理学パースペクティブ1 個人から他者へ 誠信書房 Pp. 19-34.
- Hjelle,L.A., & Ziegler,J.D. 1992 Personality theories:basic assumptions, research, and applications. 3rd ed. New York: McGraw-Hill.
- 織田信男 1993 カウンセラーに関する印象研究(1) 一 来談意図性に及ぼすカウンセラーの人間観の効果について 一 東北心理学研究, 43, 79.
- 田中敏・山際勇一郎 1992 新訂 ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法 改訂2版 教育出版
- 吉原智恵子 1991 不斉合な情報の処理様式の研究 一 対人情報を材料として 一 実験社会心理学研究, 31(1), 39-48.
- 吉村 英 1987 対人認知における体制化のメカニズムと印象の残りやすさに関する研究 実験社会心理学研究, 27(1), 47-58.